

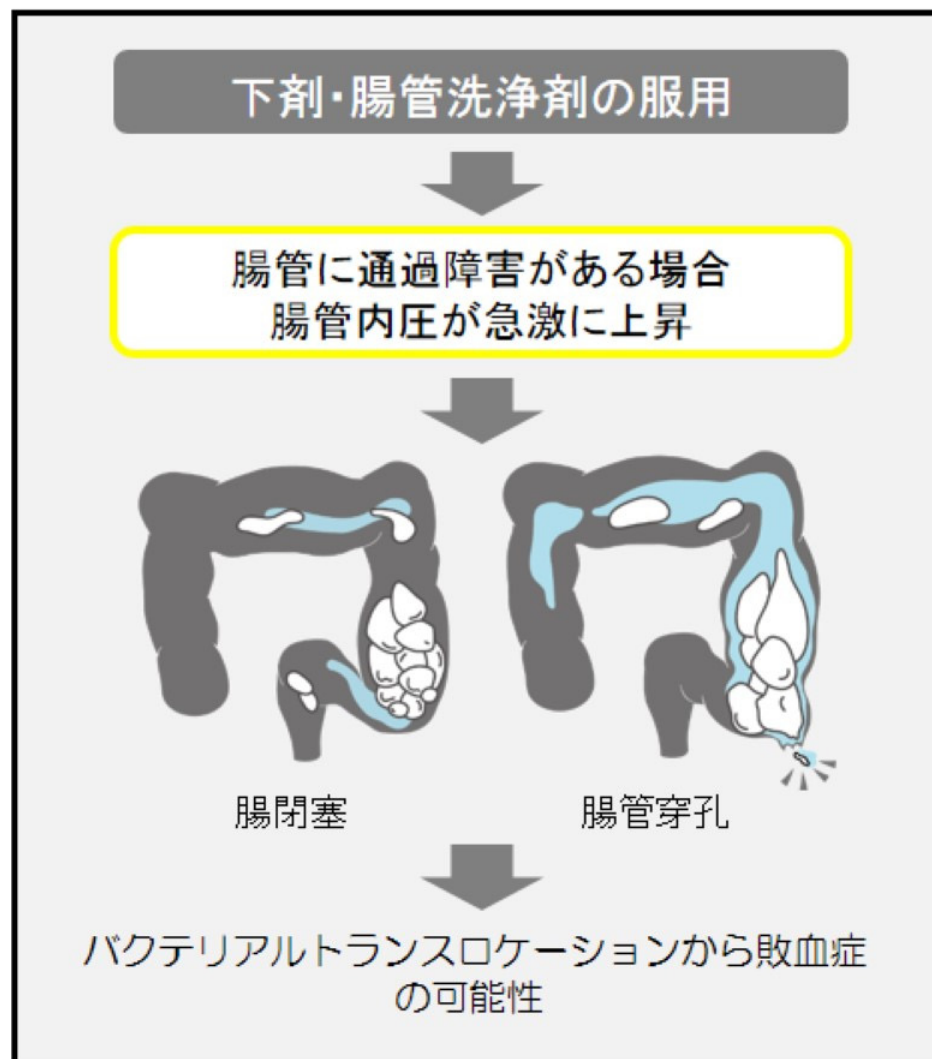
大腸内視鏡検査等の前処置に係る死亡事例の分析

提言の概要

本資料は、医療事故調査・支援センターが公表した医療事故の再発防止に向けた提言第10号「大腸内視鏡検査等の前処置に係る死亡事例の分析」より、ポイントとなる内容を抽出し作成しています。医療機関での研修等の資料としてご活用いただき、広く周知いただきますようお願いいたします。

【リスクの認識】

提言1 大腸内視鏡検査等の前処置として使用する下剤・腸管洗浄剤の服用により腸管内圧が急激に上昇し、腸閉塞、腸管穿孔、敗血症などが惹起され、検査に至る前に死亡するリスクがあることを認識する。



- 腸管に通過障害がある場合、前処置薬の服用により、腸管内圧が急激に上昇し、腸閉塞や腸管穿孔を起こす可能性がある。
- 腸閉塞、腸管穿孔に至った場合、細菌や毒素が体内に移行し(バクテリアルトランスロケーション)、敗血症性ショックとなり、死亡する可能性がある。

POINT

- ・この提言での前処置薬は、下剤と腸管洗浄剤の両者をさしています。
- ・急激な腸蠕動運動で排泄を促す下剤と、腸管内に大量の水分を供給し一気に洗浄する腸管洗浄剤があります。

【適応】《腸管の通過障害の評価と前処置》

提言2 日常の排便状態、服用薬、腹部手術の既往などから腸管の通過障害の有無を評価し、検査方法に対する患者の理解度などを考慮したうえで、適応および前処置の方法を慎重に判断する。

大腸内視鏡検査をオーダーする前に

腸管の通過障害の評価に必要な情報



排便状態



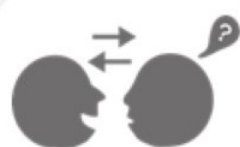
腹部手術の既往



下剤服用の有無



ADL



意思疎通の状況



画像

前処置の方法の検討

- 大腸内視鏡検査を予定するにあたり、まず日常の排便状態、腹部手術の既往、服用薬などから腸管の通過障害の有無を評価する。
- 腸管の通過障害が疑われる場合は、年齢や体力低下、併存疾患の有無などをふまえ、検査の適応を判断する。
- 前処置薬服用により起こりうる合併症を、患者・家族へ十分説明し同意を得る。

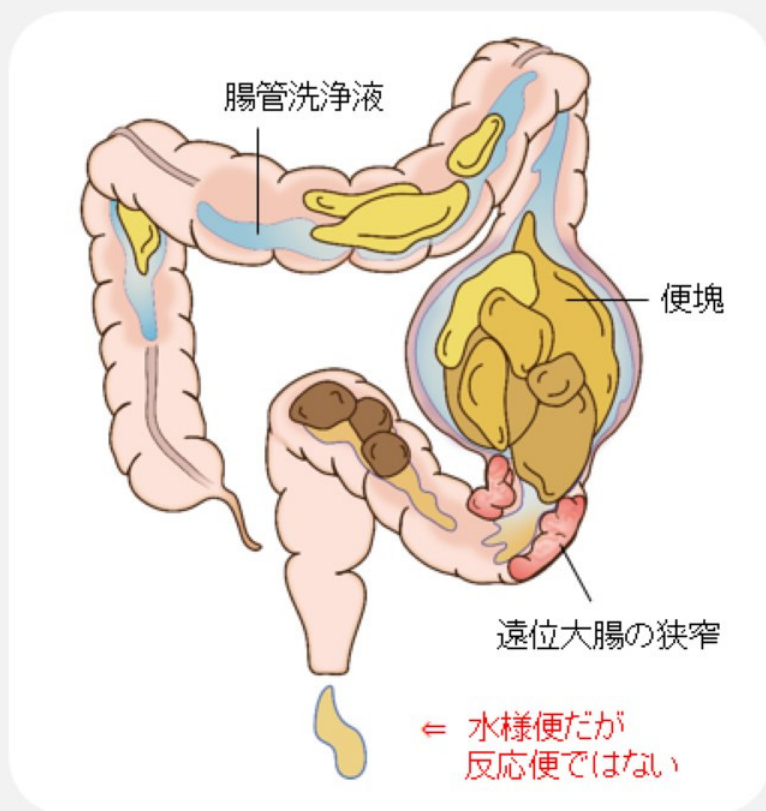
POINT

- ・リスクがある患者には、検査数日前から低残渣食や下剤を併用するなど排便コントロールを行い、前処置の方法について検討しましょう。

【適応】《遠位大腸狭窄への対応》

提言3 遠位大腸(S状結腸～直腸)に狭窄が疑われる場合は、前処置により腸閉塞、腸管穿孔を惹起する可能性がある。まず直腸指診、単純X線検査、腹部・骨盤CT検査などで閉塞状態を確認することが望ましい。そのうえで、低残渣食の併用、浣腸などの代替する処置を検討する。

遠位大腸狭窄部に便が貯留した例



- 特に、遠位大腸(S状結腸～直腸)に狭窄がある場合、狭窄部位で便の通過が障害され、水分吸収が進み、便塊となって貯留する。
- 便塊が貯留している状態で前処置薬を服用すると、便塊の隙間から流れる水様便が反応便のように見えるが、想定する反応便ではない可能性がある。

POINT

・遠位大腸に狭窄が疑われる場合は、グリセリン浣腸や微温湯、生理食塩水などの浣腸、あるいは前処置をしないことも含めて代替する処置を検討しましょう。

【観察と判断】≪腸管洗浄剤 服用前≫

提言4 下剤を服用しても反応便がない場合は、腸管の通過障害を疑って診察を行い、必要に応じて単純X線検査などを考慮する。そのうえで、腸管洗浄剤の服用のステップに進むか否かを判断する。

検査当日、腸管洗浄剤を服用する前に

下剤服用後の観察

●自覚症状

- 排便はあったか（便の回数、便の量・形・色、最終排便日時）
- 吐き気はないか
- 腹痛はないか
- 腹部の張りはないか

●観察項目

- 腹部膨満の有無（部位・程度など）
- 腸蠕動音の種類（金属音、蠕動音亢進・減少・消失など）
- バイタルサイン（血圧・脈拍数・呼吸数・SpO₂）
- 表情、体動などの様子

反応便・腹部症状の確認
診察・必要時X線検査

腸管洗浄剤を慎重に服用



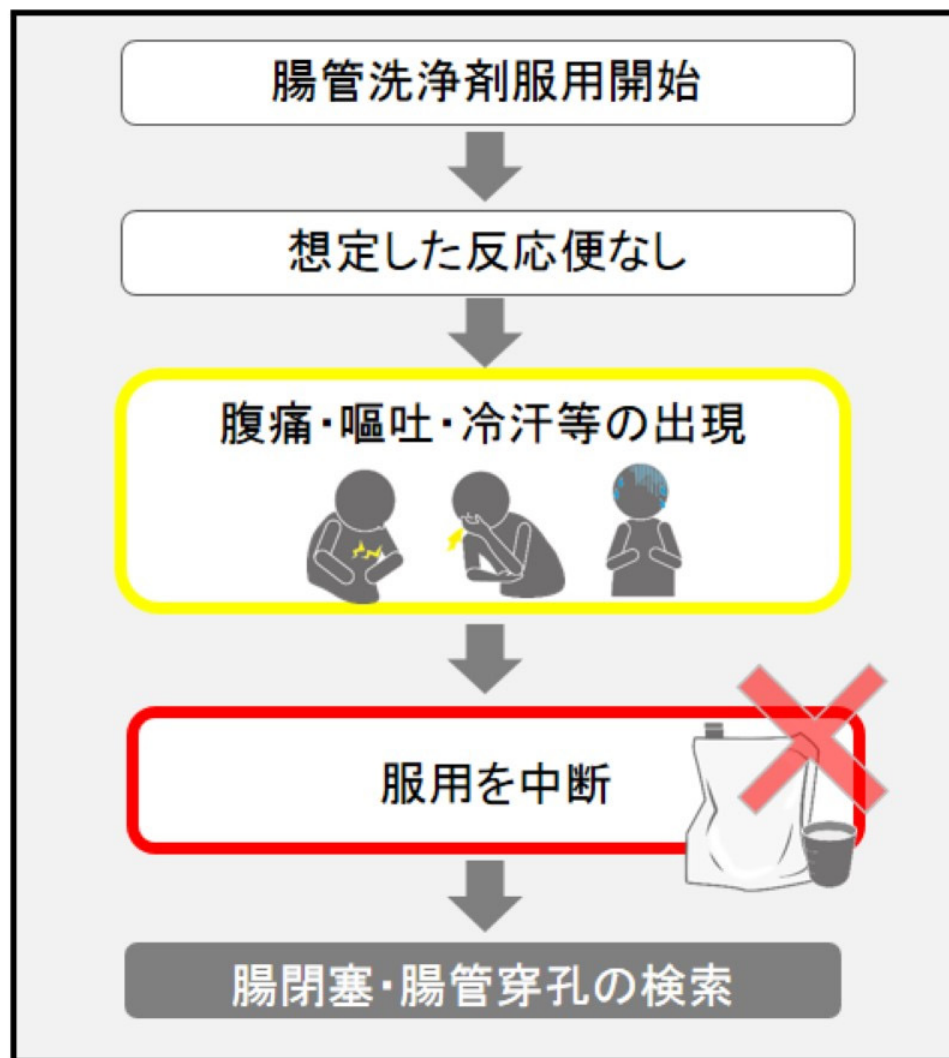
- 下剤を服用しても反応便がないまま腸管洗浄剤を服用すると、急激な腸管内圧の上昇を招く危険性がある。
- 腸管洗浄剤を服用する前には反応便を確認する。
- 反応便がない場合は、腹部症状を観察し通過障害がないか診察を行った後に、腸管洗浄剤服用のステップに進む。

POINT

- ・反応便がないが腸管洗浄剤の服用が可能と判断した場合は、医療従事者の観察のもとで、ゆっくり服用を進めましょう。
- ・意思疎通困難な患者は自覚症状の把握が難しいため、慎重かつ客観的な観察が求められます。

【観察と判断】≪腸管洗浄剤 服用開始後≫

提言5 腸管洗浄剤を服用しても想定した反応便がなく、腹痛、嘔吐、冷汗などの症状が出現した場合は、まず服用を中断して速やかに診察を行う。
必要に応じて画像検査などを実施し、腸閉塞、腸管穿孔の有無を診断する。



- 反応便がないまま、腸管洗浄剤を服用した場合、腹痛・嘔吐・冷汗等の症状出現やバイタルサインの変化は、急変のサインの可能性がある。
- この様な症状が出現した場合は、服用を中断し速やかに診察を行い、腸閉塞、腸管穿孔の有無を確認する。

POINT

- ・通常、腸管洗浄剤を1000mL程度服用するまでには、洗浄液とともに便が排泄されることが多いとされています。
- ・一度に多くの患者を対象とする場合は、リスクの高い患者を予め把握しておきましょう。